

第61回

日本伝統工芸展 金沢展



第61回日本伝統工芸展金沢展より
文部科学大臣賞「蒔絵八角箱「月華」」大角裕二(石川)

特別陳列

―いのちの花― 稲元実展

名物裂と調度

石川県の名宝

石川の工芸(後期)

石川の作家たち

- 企画展Topics
- 11月の行事
- 今月の企画展示室
- 展覧会回顧
- 所蔵品紹介



―いのちの花― 稲元実展より
稲元実「21stC 水の星」

1F企画展示室

第61回 日本伝統工芸展 金沢展

◆主催／石川県教育委員会、日本放送協会金沢放送局、朝日新聞社、北國新聞社、日本工芸会

◆後援／文化庁、富山県教育委員会、福井県教育委員会

10月31日(金)～11月9日(日) 会期中無休 ※最終日(11月9日)は午後5時まで(入場は午後4時30分まで)

我が国は、四季の気候条件に恵まれ、多様な自然環境を形成しています。その中で、各地の風土に根ざした工芸品が生み出され、伝統技術を大切に継承し発展させてきました。本展は、この優れた伝統技術の保護と後継者の育成、ならびに伝統工芸に対する普及を目的として、毎年開催されるものです。

六十一回目となる本年は、陶芸・染織・漆芸・金工・木竹工・人形・諸工芸(七宝・硝子・截金など)の七部門の入選作品五九九点の中から、重要無形文化財保持者・受賞者等の作品と、北陸三県、及びその他の地域の入選作品を含め、三五八点を展示します。

今回の石川県の入選者は七十六人で、そのうち大角裕二氏(漆芸)が文部科学大臣賞、米田和氏(陶芸)が朝日新聞社賞、山田勘太氏(漆芸)・清水竜朗氏(金工)が日本工芸会奨励賞を、それぞれ受賞されました。



朝日新聞社賞「黒描鳥花文鉢」米田和(石川)



日本工芸会奨励賞「乾漆蓋物「碗」」山田勘太(石川)

◆展示作品解説

日時	11時～	13時30分～
11月1日(土)	《染織》二塚長生	《陶芸》武腰潤
2日(日)	《金工》大澤光民	講演会
3日(月・祝)	《染織》每田健治	《陶芸》宮西篤士
4日(火)	《金工》村上浩堂	《漆芸》前史雄
5日(水)	《漆芸》中野孝一	《人形》紺谷力
6日(木)	《木竹工》灰外達夫	《陶芸》中田一於
7日(金)	《金工》魚住為樂	《漆芸》小森邦衛
8日(土)	《木竹工》川北良造	美術館長 嶋崎丞
9日(日)		

◆講演会

演題／「受け継ぐこと伝えること」

～型の美を求めて～

講師／鈴木滋人氏

(重要無形文化財「木版摺更紗」保持者)

日時／11月2日(日) 午後1時30分～

会場／美術館ホール 《聴講無料》



鈴木滋人氏

◆観覧料

	個人	団体(20名以上)
一般	六〇〇円	五〇〇円
大学生	四〇〇円	三〇〇円
高校生以下	無料	無料

※当館友の会会員は、受付での会員証提示により団体料金になります。



日本工芸会奨励賞
「躰銀花器「纏」」清水竜朗(福井)

—いのちの花— 稲元実展

10月30日(木)～11月24日(月・休) 会期中無休

稲元実は、一九四六年石川県七尾市の蒔絵を
業とする家に生まれました。五歳で東京に転居
し、六十九年武蔵野美術大学日本画科を卒業。七
十一年から加藤東一に師事します。その後日展に
おいて頭角を現し、昨夏に六十六年の生涯を閉じ
るまで、日本画家として歩み続けました。

稲元の創作を語る時、欠かせないのが一貫し
た主題と描写力です。生涯にわたり主題としたの
は「家族」。初期は妻と自身をモデルに、やがて子
ども達加わり、変容する家族の姿を描きだしま
す。二回目の日展特選作「歩拾弑歳」は、その構成
からは、長女の誕生日を祝う記念写真を思わせま
すが、背景、そして夫婦の表情には不安感を漂わ
せています。稲元の手法はときに家族のありさま
を如実に描き、そこに内在する正負の感情を暗喩
的に描き出します。また、「野辺」(一九八〇)のよ
うに家族の姿に物語を投影させる手法も用います

が、その物語は極めて個人的で解釈は両義的です。
簡単に割り切れないわかりづらさが、作品に奥行
きを与えることに一役買っています。

そして写実に徹し、卓抜した描写力は、人物、花
鳥とジャンルを問わず揺るぎない個性を伴い、対
象の奥に湛える生命感をすくい上げるようです。
特に清廉な白い牡丹は、花鳥画の様式を超越しな
がらも徹底した写生に裏打ちされ、鑑賞する者の
眼を惹きつけずにはおかない芳香を放ちます。「彼
の描写力は高い水準に達している。」「真面目な男
で独自の画境を確立し、ますますその探求に
精進し着実に前進するであろう。」とは、若き
稲元の個展に宛てた師加藤東一の言葉です。

本展では、稲元実の初期から晩年までの代
表作二十七点で、日本画の次代を担う旗手と
して歩んだ軌跡を辿ります。

学芸員の眼

日本画の主題、表現の方法は、戦後大きな変容を見せました。戦前期までは、いわゆる花鳥画、歴史画な
どに代表される日本的、伝統的な主題が主流でした。戦後、昭和三十年代を中心に抽象的な表現を含め、幅
広く主題がとられるようになります。しかし稲元のように、私的な世界を主題として設定することは一般
的ではありませんでした。当時、モデルに家族を選ぶことはあっても、継続的に自身や家族を主題として
作品化し、成功した作家は希だったのです。稲元が様々な角度から様々な手法で「自身」と「家族」の有り様
を日本画で作品化したことは、近代に私小説が登場したことや、現代写真界に「私写真」という概念が登場
したことに通ずるものを感じます。



「歩拾弑歳」1980年



「野辺」1980年



「気」1997年

石川県の名宝

10月30日(木)～11月24日(月・休)
会期中無休

この数は富山・福井両県をしのぎ、全国的に見ても上位に位置づけられます。こうした文化財が石川に伝わるのは、加賀藩主前田家の文化政策が大い

に貢献しています。前田家が収集し、育成した数々の名品が、時代を超えて今日に引き継がれているのです。また、その歴史的背景を基盤とした今日の文化風土は、芸術・文化全般に対する関心の高さを物語っています。

今年度の展示では「石川県の名宝」と題して、国宝・重要文化財・石川県指定文化財を紹介いたします。見どころは当館所蔵の「色絵雉香炉」と白山比咩神社所蔵の「剣 銘吉光」で、いずれも国宝です。現在石川に二件の国宝が存在するのみで、それを同時に見ることのできるまたとない展覧です。ぜひこの機会にご覧ください。



国宝「剣 銘吉光」
鎌倉時代(13世紀) 白山比咩神社蔵

名物裂と調度

10月30日(木)～11月24日(月・休)
会期中無休

毎年恒例の名物裂の展示を行います。「名物裂」とは、主に十五～六世紀頃にわが国に舶載された裂のうち、特に茶人や好事家たちに珍重され、茶器の仕覆や書画に用いられた裂をいいます。前田家では、三代利常の時代に長崎にてそれらを求めたとされ、現在でも前田家伝来の名物裂は、その量と質で国内随一の豊かさを誇ります。これらは、東京と京都の両国立博物館にも分蔵されていますが、現在本館に寄託されている育徳会所蔵の名物裂は金襴・緞子・間道・モールなど八十八種です。本特集では、うち金襴十五種、緞子三種、錦一種、間道三種、モール一種の計二十三点と、名物裂で仕立てた能装束一領に、硯箱などの調度品を合わせて紹介します。

二年ぶりの公開なる「双鳳丸文様金襴」は、尾をなびかせながら羽を広げた二羽の鳳凰が丸文様を構成した上品なデザインの前田家の裂で、その昔足利義政がこの裂で仕立てた装束で能「二人静」を舞ったと伝えられることから、「二人静金襴」とも呼ばれています。嘉永五年(一八五二)に仕立てられた能装束「色無金入蜀江形大丸紋唐織」の畳紙には、「古渡」の文字が記されています。「古渡」とは、名物裂の中でも特に古いものとして珍重された裂をいい、育徳会には、他にも能装束一領、佩楯に裂が用いられた甲冑が一領伝えられています。能装束や甲冑にまで名物裂が用いられるとは、前田家の豊かさがうかがえます。

「色無金入蜀江形大丸紋唐織」

第3・6展示室

石川の作家たち

— 絵画・彫刻 —

10月30日(木)～11月24日(月・休) 会期中無休

今回は石川県ゆかりの作家の優品紹介です。彫刻部門の主な展示品では、輪島市出身の木戸修「スパイラルリング#3」は何枚ものステンレス板を熔接し精密に形成したもので、素材の魅力を引き出したシャープで現代的感覚の作品です。金沢市出身の畝村直久「若い都会の女」は昭和七年（一九三二）第十三回帝展特選作です。タイトルからもモガを連想するような華奢な体躯の女性を立体派的な面構成で表し時代背景を感じさせてくれる作品です。白山市生まれの山下晴子「SLIDE No.3」は白い大理石を少しずつずらしてリング状に繋げたように彫り出した作品です。理知的で緊張感ある空間を創出しています。

石川の洋画家と言えば高光一也、宮本三郎、南政善、

鴨居玲と名が上がりまます。中で、高光は唯一金沢に暮らして制作を続けた画家でした。「地方にいても中央の作家には負けない」という強烈な自信は、後進の大きな励みとなりました。亡くなったのは昭和六十一年十一月十二日、既に二十八年が経ちます。命日を機に、ほぼ十年を一区切りに展開した画業を、旧金沢駅コンコースを飾っていた大作「森の精」を交え、各時代の代表作により特集展示いたします。またライバル宮本と南の作品も複数展示し、石川の洋画壇を牽引した三人の画業を概観します。そして抽象画家として活躍した勝本富士雄、田賀亮三の大作もぜひご覧下さい。

このほか、金沢美術工芸大学出身の作家を中心に、石川ゆかりの日本画家の優品をご堪能ください。



高光一也「森の精」

第5展示室

石川の工芸(後期)

— 工芸 —

10月30日(木)～11月24日(月・休) 会期中無休

十月二十六日まで行われた企画展「工芸王国の実力！」に際して、二階コレクション展示の第5展示室では、企画展で紹介されなかった作品を中心とした特集を組みました。今回はその第二弾第六十一回日本伝統工芸展の開催に合わせた「石川の工芸」の後期です。

石川県は工芸に従事する人が多く、人口に対する伝統工芸展入賞者の割合は全国一であり、日展や現代工芸などでも、石川県出身や石川県在住の作家の入賞者は多く、また重鎮として活躍する作家も大勢見られます。

今回の展示では物故者から現存作家まで、さまざまなジャンルの優品を紹介します。

壁面ケースの一番手前には、蒔絵の人間国宝・大場松魚の「平文薄の棚」を展示します。平文とは模様

の形に切った金銀の薄板を、塗り上げた漆面に貼り研ぎ出して模様を表す技法です。正倉院御物にも見られるこの技法を研究し、独自の表現を追求した大場は、ここでは夜露を表す小さな真珠の他は、黒漆地に金平文のみで風になびく薄を表しました。筆で描いたような流麗な線が美しい本作は、平文の特色を生かした作者の代表作です。

日展出品作からは、木工芸の人間国宝・氷見晃堂の「桐寄木象嵌之筥」、談議所栄二の染屏風「秋」、陶芸は中村翠恒の「彩容」、そして文化勲章受章者、十代大樋長左衛門の「黒絵立鼓花器」を展示します。十代長左衛門は鉛釉と黒釉の抹茶碗を合わせて展示し、伝統の継承と自らの創意を表現した、二つの作風を併せて紹介します。



大場松魚「平文薄の棚」1978年

高山右近とその時代



「西洋風俗図」(部分)
17世紀初期 歸空庵蔵

来年一月四日から二月八日の「高山右近とその時代」の会期中、講演会、講座など多彩な関連イベントを企画しています。今回は、その中で唯一事前申し込みが必要なミュージアム・コンサートの詳細をお知らせします。

タイトル／

『平井み帆チエンバロ・リサイタル』

―鍵盤音楽でたどる「高山右近とその時代」―

日時／平成二十七年一月十二日(月・祝)

午後一時三十分～午後三時

会場／美術館ホール、入場無料ですが事前申し込みによる

整理券が必要です。

内容／オランダ、デン・ハーグ王立音楽院でチエンバロ、古楽を学び、国内外で活発な演奏活動を展開している平井み帆氏によるトークを交えた演奏で、十六世紀から十七世紀の「高山右近とその時代」にスペイン、イタリア、オランダなどで広く愛好され、当時の日本でも演奏された可能性がある名曲を紹介し、展覧会とあわせてこの時代の雰囲気味わっていただきます。

曲目

A・deカベンソン・変奏付きのパヴァーナ

G・フレスコバルデイ・フォリアによる変奏曲

J・P・スヴェーリンク・涙のパヴァーナ ほか

◆申込方法／左記の通り、**入場希望者一名につき二通の往復はがき**で当館までお申込ください。
(本企画は小学生以上の方を対象とします。)

【往信の宛名面】

〒九二〇〇―〇九六三 金沢市出羽町二―一 石川県立美術館
ミュージアム・コンサート係宛

【往信の文面】申込者の郵便番号・住所・氏名・電話番号

【返信の宛名面】申込者の郵便番号・住所・氏名

【返信の文面】応募結果を印刷しますので、何も書かないでください。

【応募締切】十二月十日(水)必着

※応募者多数の場合は抽選となります。

十一月の行事予定

■土曜講座	午後1時30分～ 講義室	聴講無料
8日(土)	加藤東一 一門と稲元実 前多武志 学芸専門員	
■キッズプログラム	午後1時30分～ 二階ロビー	参加無料
16日(日)	特集展示「石川の名宝」鑑賞講座 石川のお宝知ってる?	

第7～9展小室

古今独歩 出口王仁三郎とその一門の作品展

気韻生動―耀盃と書画―

十一月十二日(水)～二十四日(月・休) 会期中無休

「古今独歩」「気韻生動」と称される陶芸・書画展が再び石川県立美術館で開催されます。

思想家であり、芸術家としても知られる出口王仁三郎は、一年余りの間に三千点余の手ひねり茶碗「耀盃」を作陶するなど、その創作活動にも様々な逸話が残されています。

没後、作品の評価が一気に高まり、パリ・ニューヨークでも作品が脚光を浴び、近年は国内の主要都市で再び開催の機運が高まっています。

また、その一門の方々の作品も、高く評価されており、選りすぐりの作品百二十点余が一堂に揃います。ぜひ、この機会にご高覧下さい。

◇入場料 一般/六〇〇円、高校生以下/無料、

当館友の会会員は五〇〇円

◇連絡先 岩田貞広 電話〇七六一―四四―一三六一

尊經閣文庫名品展 — 国宝『類聚国史』を中心に — Motion & Still 塑造人形之美

尊經閣文庫名品展

— 国宝『類聚国史』を中心に —

前田育徳会尊經閣文庫分館では、夏の時期に近年開催している恒例の特別陳列「尊經閣文庫名品展」を開催しました。本年は、「国宝『類聚国史』を中心に」の副タイトルで、同作品にあわせて、室町時代や江戸時代の模写本、また『類聚国史』の編者であり前田家の遠祖として綱紀が篤く尊崇した菅原道真に関連する書跡等十二件を公開し、加賀藩前田家の文化に対する想いを紹介しました。（公財）前田育徳会は、国宝二十二点、重要文化財七十七点を所蔵していますが、そうした文化財の公開を楽しみにされている方々がいらっしゃいますので、近年の間予定には、殊に国宝の展示を開催するにあたっては、なるべく展覧会の副タイトルに標記するようにしています。また、文化財保存の観点から、会期半ばでの展示替（今回の場合は、巻子の巻替）を行いました。が、遠方の熱心な鑑賞者はこの時期にあわせて、来館されるという光景が今年も見られました。

「国宝『類聚国史』」は現存最古の平安時代末期の古写本です。同書は五代藩主前田綱紀の収集によるもので、あわせて綱紀が作らせた模写本を展示しましたが、こうした綱紀の業績は、今日の文化財保存事業の先駆けと言えるものです。加賀百万石の文化は、華やかさでのみ捉えられがちですが、綱紀の「学ぶ」という深い探究心が加賀文化の基盤となっていることを、これからも「尊經閣文庫名品展」で紹介していきます。

国宝『類聚国史』

Motion & Still 塑造人形之美

— 紺谷力・井口十糸・山本榮子 —

八月中の第5展示室では、石川県の人形作家に焦点を当てた特別陳列を行いました。石川県の創作人形は、故下口宗美の下に数多くの作家が集い、日展や日本伝統工芸展などに出品していました。今回は下口宗美門下の中から、主として日本伝統工芸展を中心に活躍している、紺谷力、井口十糸、山本榮子の三作家を選びました。一台に二点ずつ入る、第5展示室の展示ケース十二台を、各作家四台ずつ計八台の作品を展示しましたが、それぞれ全く違った作風であるため、バラエティに富んだ展観となりました。

伝統工芸展で鑑査委員を務める、紺谷力の躍動感のある人形は、展覧会でよく目にしてはいるのですが、まとめて観ると改めてその技術の高さ、確立した世界観の素晴らしさに驚かされました。現在は制作を休止している井口十糸の作品の、愛らしいだけではない、複雑なごももの自我まで垣間見える表現力には、根強いファンが多いことに納得させられます。山本榮子は展覧会出品の初期作品から、最新の受賞作までの出品となりましたが、今後どのように変化していくのか、期待を抱かせる作品群でした。

隣の第6展示室では、毎年恒例のこども向け特集展示を開催しており、会期中にコレクション展示室すべてを対象としたワークショップが行われました。この展示を観て、工芸には創作人形というジャンルがあり、伝統的な技術を今に生かす制作が行われていることを、ご存知なかった方々にも知っていただく機会になったのではないかと思います。最後になりましたが、本展示開催に当たって、ご出品、ご協力を賜りました関係者の方々に深くお礼を申し上げます。



Motion & Still 塑造人形之美

中田一於 なかた・かずお 平成3年(1991) 第14回伝統九谷焼工芸展



(部分)



作者は昭和二十四年小松市に生まれ、高等学校卒業後、家業を継ぎ陶芸一般を習得。四十九年一水会陶芸展に初入選、以後受賞を重ねていきます。また、五十三年日本伝統工芸展に初入選、五十七年日本工芸会奨励賞、平成二年文部大臣賞、二十二年日本工芸会保持者賞を受賞。そのほか、朝日陶芸展、中日国際陶芸展、伝統九谷焼工芸展など出品多数。現在、日本工芸会理事、また石川支部幹事長を務め、石川陶芸界の発展に尽力されています。

このように作者は、従来の九谷焼に見られる金を使った華やかな表現に対し、控えめな輝きを呈する銀を大胆に使い、格調高い表現にまで昇華させ、その磨き抜かれた技は、作者の真骨頂を示すものということができます。

本作は、四つの角を持ついわゆる四方鉢の形体をした作品です。しかしその姿は円に近く、一辺が三五センチほどのゆるやかな弧を、四つの点でつないだ独特のフォルムを見せています。その見込みいっぱい表現された花の大輪は、文様の形に切った銀箔を貼り、その上に釉薬をかけて焼成した釉裏銀彩の手法で表現され、銀の深い輝きと淡青色の透明な釉薬が見事に調和して、気品のある趣を呈しています。その銀箔も、厚さや形を変えて貼り重ね、花びらが見込みの中心から外側に、時計回りにひらひらと飛んでいくような可憐な動きと奥行きを感じさせます。また文様の空間には、大きさ・厚みの異なる円文を配し、まるで花びらについていた水滴が飛散しているようで、情豊かな表現となっています。

次回の展覧会

会期: 11月27日(木)~
12月23日(火・祝)

前田育徳会 尊経閣文庫分館		第2展示室		ご利用案内 コレクション展観覧料 一般 360円(290円) 大学生 290円(230円) 高校生以下 無料 ※()内は団体料金 毎月第1月曜日はコレクション展示室無料の日(11月は3日) 今月の開館時間 午前9:30~午後6:00 カフェ営業時間 午前10:00~午後7:00 年中無休 11月の休館日 25日(火)・26日(水)
溶姫と婚礼調度		大乗寺の文化財		
第3展示室	第4展示室	第5展示室	第6展示室	
風景画の魅力 —油彩画—	群像 [彫刻]	館蔵優品選 —工芸—	風景画の魅力 —日本画—	

Meiカード 広告

ポイントプラスデー 3% ポイントプラス

毎週水曜日はエムザでお買物

Meiカード 通常ポイント +

MEITETSU MIZA めいてつ・エムザ

金沢 むさし TEL(076)260-1111(代) www.meitetsumza.com 10時~19時30分(地階レストラン街・書籍は21時まで)

石川県立美術館だより
第373号(毎月発行)
2014年11月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel:076(231)7580
Fax:076(224)9550
URL http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/